

平成 21年 5月 1日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008年度
 課題番号：18710210
 研究課題名（和文）スルー海域の海サマ社会における開発過程の国家間比較 経済・宗教・民族間関係の動態
 研究課題名（英文） A Comparative Study on Development Process of the Sama Dilaut in Sulu Sea: Dynamics of their Economy, Religion and Ethnic Relation
 研究代表者 長津一史（Nagatsu Kazufumi）
 東洋大学・社会学部・准教授
 研究者番号 20324676

研究成果の概要：本研究では、マレーシア・サバ州東岸およびインドネシア・スラウェシ島周辺の海サマ人社会に焦点をおき、経済活動の変化、宗教実践の変化、民族間関係の再編という三つの側面から捉えられたサマ人と開発との動態的関わりを、1970年代半ばから現在までの約30年の時間の幅で比較考察した。研究方法は定着調査と広域概査をあわせたフィールドワーク、ならびに史資料調査である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	330,000	3,730,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：東南アジア、スルー海域、開発と周縁社会、国家間比較

1. 研究開始当初の背景

代表者は、本研究課題を開始する時点まで、マレーシア、インドネシア、フィリピンの三カ国にまたがるスルー海域に分散居住する海サマ人の社会・文化変容に関する研究を続けていた。海サマ人は20世紀半ばまで、船上生活を営む精霊信仰の民であり、ムスリムが人口の多数を占めるスルー海域において文化的、また政治経済的な面で周縁的地位におかれてきた。

スルー海域の海サマ人のあいだでは、1960～70年代以降、定住化、漁業形態の多様化、経済的階層分化、イスラームの受容といった

変化が急速に進行した。海サマ人を対象とした従来の民族誌や他の社会学的研究では、こうした変化は、かれらの多数派ムスリム集団（タウスグ人や陸サマ人）への「文化的同化」の帰結とみなされることが多かった。これに対し代表者は、過去の調査研究を通じて、いま述べた一連の変化を含む海サマ人社会の変容は、かれらと上記の三カ国それぞれの開発政策の拡大や、政府機関による宗教の制度化のような具体的な政治過程との相互作用のもとで生じた動態的な現象として理解されるべきであると考えていた。

代表者は、こうした認識のもと、スルー海域の三地域それぞれの海サマ人が、国家の宗

教領域への介入を含む広義の「開発」との相互作用を通じて、いかに自らの社会・文化生活を再編してきたのか、その歴史過程を再構築し、国民国家形成後の東南アジア海域世界のダイナミズムを「周縁社会」の視点から明らかにすることを、中・長期的な研究構想として掲げていた。本研究課題は、その一環として実施されたものである。

2. 研究の目的

上に述べたような中期・長期の研究構想をふまえ、本研究課題では次のような目的を設定した。つまり、マレーシア・サバ州とインドネシア・スラウェシ島周辺のサマ社会に焦点をおき、経済活動の変化、宗教実践の変化、民族間関係の再編の三側面から捉えられたサマ人と開発との動態的関わりを、上記の二カ国において開発政策が本格的に進められるようになる1970年代半ばから現在までの約30年の時間の幅で比較考察することである。なお、申請当初は、対象集団を海サマ人としていたが、海サマ人という民族カテゴリーはインドネシアでは適切ではないためサマ人とした。また、インドネシアの調査地はスラウェシ北部としていたが、サマ社会における開発のダイナミクスを考察するうえで、かれらの集落が拡散分布するスラウェシ周辺を広域概査する必要があり、またスラウェシ周辺の他地域、特に東ジャワ州カンゲアン諸島での定着調査が必要であると判断されたため、上記のようにスラウェシ島周辺を調査地とした。

3. 研究の方法

マレーシア、インドネシア両国の開発政策の特徴は、それが住民の経済領域のみならず、宗教領域にも介入し、宗教生活の「進歩」、実質的には国家が管理する宗教(ここではイスラームを指す)の受容・実践を要請してきた点にある。こうした特徴をもつ両国の開発の海サマ社会へのインパクトは、かれらの他の多数派集団に対する従属的地位の変化(ないし持続)という側面からも検討される必要がある。

以上の点をふまえて本研究では、サマ人の移動的な小規模漁業を中心とする経済活動、さらに精霊信仰に基づく宗教体系等の文化面での様式・実践が開発の過程でいかに変容し、その結果、海サマ人と多数派民族との社会関係がいかに再編されたのか、そしてこれらの三項目について二地域間でどのような差異と共通点がみられるのかを、定着調査と広域概査を合わせたフィールドワーク、ならびに植民地資料、現地の行政文書等の

一次的な史資料調査に基づき実証的に考察しようとした。主な調査地は、下記のとおりである。

マレーシア: サバ州東岸センボルナ Semporna 郡および西岸トゥアラン Tuaran 郡、コタ・ブルド Kota Belud 郡のサマ人集落、各郡の郡役所、イスラーム局支部/ヌグリスンピラン州ニライ Nilai(都市就労のサマ人が居住する)

インドネシア: 北スラウェシ州ウォリ Wori 県、ゴロンタロ州パフワト Pahuwato 県、南スラウェシ州マカッサル沖合スプルモンデ Spermonde 諸島、東ジャワ州スヌブ Sumenep 県カンゲアン Kangean 諸島のサマ人集落、各県の県役所、イスラーム協会 Persatuan Islam の支部

4. 研究成果

[サマ人の人口分布に関する基礎データ]

代表者は、本プロジェクトに着手するまでは、マレーシア・サバ州を中心に調査を実施してきた。そのためインドネシアのサマ人集落については、まずはその分布とインドネシアの文脈におけるサマ人の社会的位置づけを理解しておく必要があった。この点をふまえ、インドネシアにおける調査では、まずかれらの人口分布を、2000年センサスおよび広域概査によって明らかにした。

下の図は、その成果に基づいて、インドネシア、フィリピン、マレーシアの3カ国全体のサマ人集落の分布を示したものである。

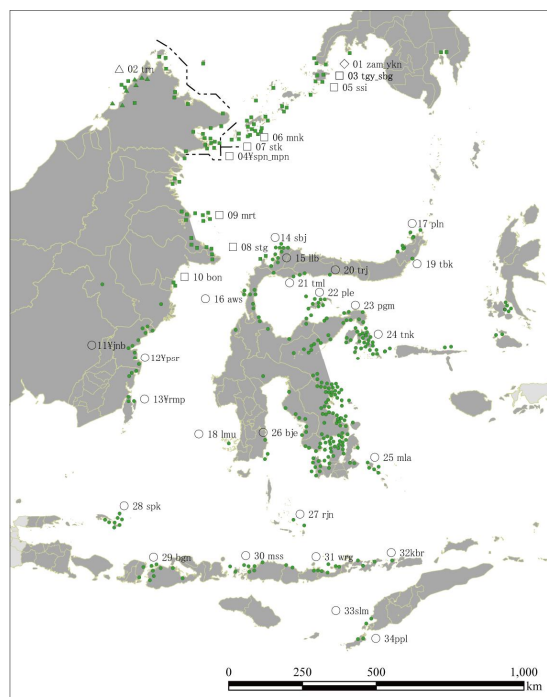


図 スラウェシを中心とするサマ人集落の分布

各国の2000年センサスによれば、フィリピン、マレーシア・サバ州、インドネシアの3カ国全体でのサマの人口は1,077,020人、国別ではフィリピンが570,857人、サバ州が347,193人、インドネシアが158,970人である。

サマ人の集落は、東西南北の幅でいえば、南北はインドネシアのロティ Roti 島からフィリピンの島の南西端までの約2000キロメートルの間に、東西では東ジャワ州沖合のカンゲアン諸島からマルク諸島までの約1300キロメートルの間に点在している。約100万人程度の言語集団の集落がこれほど広域に拡散している例は、島嶼部東南アジアでは他にない。

図が示すように、サマの人口がもっとも集中しているのは、スルー諸島からサバ州の南東岸にかけての地域である。センサスで知りうるサマの人口のうち、5割強がこの地域に住んでいる。なかでもサマ人が特に集住しているのが、スルー諸島南西端のタウィタウィ Tawi-Tawi 島周辺からサバ南東岸センボルナ沖合にかけての国境をはさんだ海域である。ただしインドネシアを含めて全体としてみるならば、サマ人は広い範囲に拡散居住しているというべきだろう。

スラウェシ周辺のサマ人集落での調査によれば、この海域のサマ人集落は、単に地理的に近接するだけでなく、集落間の通婚や移住、往来などの社会関係も密接に連続していた。またサマ語の基本語彙の調査では、この海域では、スルー海域に比べてかなり均質的なサマ語が話されていることが明らかになった。このことは、スラウェシ周辺の海域におけるかれらの移動・交流がきわめて濃密かつ包括的であること、またこの海域にはサマ語を基盤とするひとつの海域生活圏が維持されてきたことを示していると考えられる。

【サマ人社会における開発過程の比較検討】

サマ人の開発過程に関するこれまでの調査で明らかになったことの要点を、以下にまとめる。

マレーシア・サバ州におけるサマ人と開発

先に述べたようにサマ人は、マレーシア・サバ州、インドネシア・スラウェシ周辺のいずれにおいても政治経済的、また文化的な面で周縁的地位におかれてきた。しかし、マレーシア・サバ州では、1970年代以降、サマ人が国家のイスラーム化をとまなう開発政策の直接の対象になり、その開発過程で経済面、政治面でも脱周縁化を遂げてきた。これは後にみるインドネシアでも、またフィリピンでもみられない、マレーシアおよびサバ州に独自の政治的文脈において生じた現象で

あるといつてよいだろう。その文脈の根底をなしてきたのは、いうまでもなく、マレー人を中心とする「原住民」を政治経済面で優遇し、その経済状況を向上させることを目的とする開発政策、いわゆるブミプトラ Bumi-putera 政策（正式名は「新経済政策 New Economic Policy」：1971年～1990年、同様の政策はその後も継続されている）であった。

こうしたサバ州におけるサマ人の開発過程に関しては、しかしながら、次の点に留意しなければならない。それは、いま述べたような開発と脱周縁化の過程は、マレーシア国家の政治的ドミナント集団であるマレー人への文化的、社会的包摂、あるいは同化をとまなうものでもあったということである。また、その過程で、サマ人の社会内部に深刻な階層化ないし集団分化が生じたことも看過してはならない。それは、端的に言えば、国籍を持ち学校教育を受け「マレー化」できたサマ人と、国籍を持たずまた学校教育を受けることのできなかつた、つまり「マレー化」できなかったサマ人とのあいだの社会的な分断であった。

インドネシア・スラウェシ島周辺におけるサマ人と開発

他方、インドネシア・スラウェシ島周辺のサマ人社会においても、スハルト政権期に実施された「孤立した民族 Suku Terasing」政策などの開発過程の社会経済面でのインパクトがみてとれた。こうした開発の過程で、1980年代まで続いていた船上生活は消失し、漁業活動もかつての乾物（ナモコやフカヒレ等）の採取を中心とする漁業から、ハタやマグロなどの鮮魚中心の漁業に移行しつつあった。

しかしながら、かれらの社会文化生活全般に関していうならば、国家主導のマクロな開発過程の影響の程度は、マレーシアに比してみれば、はるかに小さいように思われた。確かにスラウェシ周辺のサマ人のあいだでは、経済生活面でも、また宗教生活の面でも、顕著な変化が生じていた。民族間関係についても、サマ人とブギス人やマカッサル人などの多数派集団との通婚が一般化していることや、サマ人が90年代以降、急速に社会上昇をとげていることなどが広く観察された。それは、上記の経済生活ならびに宗教生活の変化（特にイスラーム化）を背景とした現象であった。ただし、これら一連の変化は、国家主導の開発過程の帰結というよりは、むしろ非国家部門、たとえば環境 NGO や民間イスラーム団体との相互作用の帰結であったと考えられるのである。

ところでスラウェシ周辺における調査で

は、サマというエスニック・ラベルに関して次のような解釈を得るに至った。先述のように、東インドネシアでは、広い範囲で均質的なサマ語が話されている。しかしそのことは、単純にサマ人自身が移動によってその居住域を拡大してきたことを意味するわけではない。スラウェシ周辺では、サマ人は混淆的な海民集団としてこの海域で生成と再生成を繰り返してきた可能性が高い。

サマ人の「生成」ともいべき現象が特に顕著であると思われたのが、東ジャワ州カンゲアン諸島である。カンゲアン諸島は、行政的には東ジャワ州に属するが、社会文化的には南スラウェシの圏域に含まれる。

2000年センサスによれば、カンゲアン諸島の中心地であるサブカン Sapekan 島（サブカン村）の人口は 11,754 人。うちサマ人が 5,526 人で、人口の 47% を占めている。村で文化的、政治経済的な優位集団になっているのはサマ人であり、リンガ・フランカはサマ語である。

代表者がサブカン島を調査地に選んだのは、南スラウェシ州でサブカン島出身のサマ人に会い、同島ではサマ人が人口の多数を占めていると聞いたためであった。それゆえサブカン島民の多数がサマを名乗り、日常的にサマ語で会話している状況は、特に驚くべきことではなかった。

しかし、そうした自己定位のあり方は、村びとの移住歴を聞いていくうちに、「不可解な現象」に変わっていった。というのは、話を聞いた「サマ人」の多数が、出自の面では、サマ人とあいまいにしか結びつかなかったからである。

B 氏（男性）とその父である C 氏の例をみてみよう。B 氏はサブカン島生まれで、年齢は 33 歳（2007 年）。サブカン島でもっとも成功した鮮魚仲買人の一人である。はじめ B 氏は、自らを「サマ・スラウェシ」、つまりスラウェシ出身のサマであると名乗った。しかし経歴を聞くと、生まれ、育ちともにサブカン島であるという。なぜ「スラウェシ」なのかを尋ねると、父の C 氏が「スラウェシ出身のサマであるから」と答えた。私はその返答に納得したが、後に C 氏自身に聞くと、彼はスラウェシ出身ではあるが、民族出自の面ではマンダラ人であった。結果的に B 氏が出自の面でサマと結びついたのは、母方の祖父が「サマ人の子孫であつたらしい」という点においてであった（母方の祖母はマドゥラ人）。それでも彼にとっては、自らがサマ人であること、また 3 人の子供がサマ人であることは、自明のことのようであった。

B 氏の事例は、けっして例外的なものではなかった。サペカン島では、多数の住民が出自に関わらずサマ語を日常言語化し、また自らをサマ人とみなしていた。B 氏や何人かの

村びとは、しばしば「サマ語 baong Sama を話す人をサマ人というのではないのか」と述べた。その言葉は、サブカン島におけるサマ人の自己定位の様式、つまり血縁面での出自や出身地ではなく、サマ語がその指標として卓越することを端的に示しているように思われた。その様式が「不可解な現象」あつたのは、私が出自とアイデンティティとの結びつきを当然視していたからにほかならない。

スラウェシ周辺の海域では、従来からの海産資源利用とそのための移動ネットワークの活用が社会経済的に重要な意味を持ち続けている。それゆえここでは、「サマ（またはバジョ）」は、忌避されるエスニック・ラベルとしてではなく、異種混淆の海民集団が獲得しうる名乗りの一様式として機能し続けている。これがこの海域におけるサマというエスニック・ラベルについての代表者の解釈である。

まとめ

以上にみたようなスラウェシ島周辺のサマ人社会における開発過程のあり方、およびサマ人をめぐる民族間関係のあり方は、先に述べたマレーシア・サバ州におけるそれと対照的であるといえよう。サバ州のサマ人の場合は、国家主導の開発過程につくられた社会秩序が村落レベルにおいてさえ卓越するようになっており、そのことが民族間関係も規定していた。他方、インドネシアのサマ人の場合は、海域世界に持続するいわば「伝統的な」社会秩序がより卓越していた。現在は、その秩序と国家の開発過程につくられた社会秩序が絡み合うなかで、サマ人をめぐる民族間関係が再編されていると考えることができるだろう。

なお、以上の研究成果の一部は、後述の「主な発表論文等」において公表している。

【今後の展望】

本研究の調査を実施したインドネシアのサマ人集落において顕著にみられたことは、1990 年代以降、グローバル・アクター、特に宗教団体や環境 NGO が開発過程に直接的に介入するようになり、同時にかれらの経済・宗教生活の再編が急激に進んでいることであった。

この知見をふまえ、2009 年度から代表者は、科学研究費補助金（基盤（C））を得て、グローバル・アクターの役割に着目してサマ人の開発過程を再考する新たな研究プロジェクトを組織、実施している。課題名は、「海域東南アジアにおけるグローバル・アクターと周縁社会—開発過程の国家間比較」（課題番号 21510271）である。

この新規研究プロジェクトでは、フィリピンとインドネシアのサマ人社会を対象とし、

1990年代以降の民間グローバル・アクターを媒介とする開発過程のダイナミクスを、「開発する側」の開発の理念、言説、実践、「開発される側」の開発にともなう経済・文化面の変容、開発をめぐる両者の相互作用・反作用の分析を通じて考察し、比較検討しようとするものである。これまでの研究と新規研究プロジェクトの成果を組み合わせることにより、東南アジア三カ国のサマ人社会および周縁社会における開発過程のダイナミクスの全体像が示されることが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

長津一史 2008. 「サマ・バジャウの人口分布に関する覚書 スラウェシ周辺域を中心に」『アジア遊学』113: 92-102, 査読有.

Nagatsu Kazufumi 2008, *Arti Sosial Perbatasan Negara: Kaji Ulang Mobilitas Orang Laut di Asia Tenggara Modern* 『東洋大学アジア地域研究センター 2007年度学術フロンティア報告書』, 査読無.

長津一史 2006. 「イスラームの制度化と宗教変容 マレーシア・サバ州、海サマ人の事例」『南太平洋海域調査研究報告』43: 45-69, 査読有.

[学会発表](計 6件)

Nagatsu Kazufumi, November 23, 2007 / “Living on the Border: Mobility and Networks of the Sama-Bajau in the Sulu-Makassar Sea,” Toyo University International Workshop “A Preliminary Study on Transnational Communities in Asian Peripheries: Perspectives from Comparative Area Studies.” (Tokyo, Toyo University).

Nagatsu Kazufumi, November 10, 2007 / “Arti Sosial Perbatasan Negara: Kaji Ulang Mobilitas Orang Laut di Asia Tenggara Modern,” (Social Meanings of Boundary: Reconsidering Maritime Movements in Modern Southeast Asia) 『東洋大学アジア文化研究所学術フロンティア国際シンポジウム：東アジア・東南アジア諸国にみる経済発展と都市化による文化変容 伝統文化と民族のアイデンティティ』 (東京：東洋大学白山キャンパス)

Nagatsu Kazufumi, May 18, 2007 / “A Genealogy of Sea Route: Continuity and

Reorganization of Maritime Networks in South-east Asia,” (Symposium “Maritime Asia and Maritime History Studies”) 52nd International Conference of Eastern Studies (Kanda, Tokyo).

長津一史 2006年12月3日 / 「イスラームの制度化と権威 マレーシア・サバ州、海サマ人のイスラーム化をめぐる」『日本イスラム協会公開講演会』(東京：東京大学本郷キャンパス)

Nagatsu Kazufumi, November 12, 2006 / “Cross-Border Movements and Convertibility of Maritime Networks: A Case of the Sama-Bajau in the Sulu-Makassar Sea” Kyoto University 21st Century COE International Symposium “Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa” (Kyoto, Kyoto University)

長津一史 2006年6月11日 / 「周辺ムスリム社会における地の伝達と権威 マレーシアとフィリピンの国境から」『東南アジア学会第75回研究大会』(名古屋：名古屋大学東山キャンパス)

[図書](計 5件)

長津一史 2009. 「島嶼部東南アジアの海民 移動と海域生活圏の系譜」藤巻正己・野間晴雄(編)『東南アジア(朝倉世界地理講座3)』東京：朝倉書店(印刷中)

長津一史 2009. 「境域の言語空間 マレーシアとインドネシアにおけるサマ人の言語使用のダイナミクス」森山幹弘・塩原朝子(編)『多言語社会インドネシア 変わりゆく国語, 地方語, 外国語の諸相』東京：めこん, 183-212 ページ.

Nagatsu Kazufumi 2008, *Living on the Border: Mobility and Networks of the Sama-Bajau in the Sulu-Makassar Sea*, In *Proceedings of “A Preliminary Study on Transnational Communities in Asian Peripheries: Perspectives from Comparative Area Studies,”* edited by Matsu-moto Seiichi and Nagatsu Kazufumi, Tokyo: Asian Cultures Research Institute, Toyo University, pp. 11-23.

Matsumoto Seiichi and Nagatsu Kazufumi (eds.) 2008, *Proceedings of “A Preliminary Study on Transnational Communities in Asian Peripheries: Perspectives from Comparative Area Studies,”* Tokyo: Asian Cultures Re-

search Institute, Toyo University.

Nagatsu Kazufumi

2006. Cross-Border Movements and Convertibility of Maritime Networks: A Case of the Sama-Bajau in the Sulu-Makassar Sea, In *Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa*, edited by Maruyama Junko, et al., Kyoto: Graduate School of Asian and African Area Studies/ Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, pp. 73-85.

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

該当せず

取得状況（計 0 件）

該当せず

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

長津 一史 (Nagatsu Kazufumi)

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号 20324676

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし